

日本語の要求表現におけるストラテジー —話し手による受け手考慮の側面から—

金 河 守

【キーワード】：要求表現、受け手考慮、ストラテジー、気配り型、話題提供型

0. はじめに

本稿の目的は、上級の日本語学習者のために、日本語の要求表現におけるストラテジー⁽¹⁾を受け手考慮の側面から考察することにある。

従来の日本語教育においては、要求表現の言語形式的な側面が重視され、表現形式の丁寧さ・間接度といった限られた側面からの考察が中心をなしていた。しかし実際には、丁寧で間接的な表現形式の学習だけでは発話行為の目的達成へ至るまでの方略を駆使することもできなければ、要求行為をめぐる人間関係の微妙な行き違いを防ぐこともできない。

しかし、日本語学習者の学習レベルが高くなるにつれて、言語媒体としての日本語の機能は意思疎通という役割から人間関係の保持といった高度なものへと変わっていくのである。すなわち、上級の日本語学習者は、要求表現の言語形式の使い分けとともにコミュニケーション・ストラテジーの遂行能力をも備えなければならないのである。そのためには、日本語教育における要求表現の研究も表現形式によるものだけでなく、要求表現のストラテジーを取り入れるための考察を行わなければならない。しかし、要求表現のストラテジーの現れ方は様々であり、その構造全体を網羅することは困難である。

したがって、本稿では、要求表現のストラテジーの考察において話し手の受け手考慮という要素を中心に考察を進めていくことにする。もちろん、要求表現のストラテジーにおいては受け手考慮という要素以外にも上下・親疎関係などの色々な要素が考えられる。しかし、要求表現においては、話し手が受け手にもものを頼んだり、受け手の行為を求めたり、主に受け手に負担を与えてしまう非常に難しい問題が関わっているのである。そのためには、話し手の受け手考慮という要素を優先させなければならないのである。

考察においては、日本人の母語話者による日常会話の分析と実際使われている日本語教科書の要求表現の分析を行う。これらの分析を通して、日本語教科書に扱われている要求表現のストラテジーの問題点を指摘するとともに上級の日本語学習者のためのより効果的な要求表現のストラテジーの取り入れ方を考察することにする。

1. 用語の定義

1.1. 要求表現の定義

本稿で取り扱う要求表現は、次の三つの要素をすべて取りそろえたものとし、その概念的定義を行うことにする⁽²⁾。

第一に、話し手の発話行為の目的は、受け手の利益に関わっているものではなく、「話し手にとって好都合」であること。二番目の要素は、話し手の発話行為による受け手の行為遂行は、「受け手の判断」によるものであり、義務的なものではない。最後に、話し手の発話行為における結果は、話し手を含まないという意味で、受け手の「単独行為」が前提になる。ただし、質問あるいは、問い合わせに対する応答（言語行為）のようなものは単独行為の範疇に入れないことにする。

1.2. 要求表現の目的達成

要求表現の目的が達成できたと見なせる時点には二つのレベルがある。一つは、受け手の単独行為が前提になる受け手の「意志表現が発せられた時点」を指し、もう一つは、話し手の要求表現による受け手の「単独行為が行われる時点」を指す。なお、受け手の単独行為が要求表現が発された発話場面で行われない前者の場合（電話による会話、後日の約束）は、受け手の意志表現をもって目的達成とみなす。

2. 日常会話における要求表現のストラテジー

2.1. データの概要

本稿で取り扱うデータは、日本人の電話による日常会話の録音によるもので、94年の6月から9月にかけて収集したものである⁽³⁾。なお、各データに関する情報はデータごとに示すことにする。

2.2. 分析の観点

話し手が受け手に何かの行為要求をする言語行動の根本的な目的は、自分の要求を通してそれを達成することにある。そのためには、話し手は受け手の心的負担を考慮しながらも目的を達成させる方法を取らざるを得ない。そこで、話し手は自分の行為要求による受け手の心的負担がどのようなもので

あるかを判断しながら会話を進めていくのである。

つまり、話し手が要求表現の言語行為に移るまでどのような受け手考慮のストラテジーを行うのか、また、要求表現の発話後にどのようなストラテジーを駆使するのかということが考察の基準になるであろう。

以上の観点から日本人母語話者による日常会話を分析し、それぞれの特徴とストラテジーの現れ方について考察することにしよう。

2.3. 分析とその結果⁽⁴⁾

【I】話し手の行為要求が受け手にそれほど心的負担を与えない場合

(1) 返送品を新しい住所の方に送ってほしいと頼む [福田-4⁽⁵⁾]

(M: 話し手 (初老の婦人) S: 受け手 (中年男性) 知らない間柄)

- 39S もしもし
40M あ、さきほどお電話したMですけど。(あはいはい)
42M あのすいませんけどねえ。(はい)
44M 例のあの一戻ってきちゃったタオルケット。(はい)
46M あの板橋区の(はい)
48M その人の住所が、今わかったんでねえ、
なんとかそっちへ送っていただけないかしらもう一度、(あー)
50S あそうですか。あはいけっこうですよ。

データ(1)は、話し手の行為要求が受け手にそれほど心的負担を与えない典型的な例とでも言えよう。受け手はデパートの職員であり、話し手の行為要求はデパートのサービスとも関わっているため、話し手による受け手の心的負担度の判断は低い。そのため、話し手の行為要求(48M⁽⁶⁾「送っていただけないかしら」)が現れるまでの発話内容には、儀礼的な発話(42M「すいませんけどねえ」)と行為要求のための情報提供(44M「戻ってきちゃったタオルケット」48M「その人の住所が分かったんでねえ」)しか見られない。

つまり、受け手の事情をうかがうとか、話し手の事情を間接的に説明するとかといった発話は見られないのである。

言語的特徴としては、儀礼表現と要求表現の使用以外に「あの」の使用が多少見られるが、それはデータ(2)においても同様のことが言えるので、次のデータをご覧いただきたい。

(2) OがKに取材をお願いする内容 [KIM-8⁽⁷⁾]

(O: 話し手 (20代・女性) K: 受け手 (30代・女性) 知らない間柄)

- 10 あの、T市、K協会の、Iさんからご紹介受けたんですけども。(はい。)
30 あのー、いま、あの、
多国せきーこう、あ、多国語講座をやってらっしゃいますよね。(はい。)
50 それで、あの、その件ですね。(はい。)
70 あの、ま、その教室とあとは、
あのー、講師のKさんご自身をご紹介する記事をですね。(はい。)

90 うちの新聞のほうで紹介したいと思うんですね。(はい。)
 110 え、それで、あの、できましたら、ちょっとお時間をいただいて、(はい。)
 130 お話しをお伺いできないかなと思うんですね。(はい。)
 150 え、あのー、今度が19日に、ありますよね。(はいはい。)
 170 この時とかは、いかがですか? / / 少し、あの、
 18K あ、はい、大丈夫です。

データ(2)は、行為要求の導入部における話し手の事情の説明など(情報提供)(10「Iさんからご紹介受けたんですけど」、70「講師のKさんご自身をご紹介する記事をですね」、90「うちの新聞のほうで紹介したいと思うんですねけれども」)が行為要求へ進む前段階になっている。もちろん、お互い面識がないということで長々とあいさつを交わしたり(関係づくり)することはできないと考えられるが、行為要求(110「ちょっとお時間をいただいて」130「お話しをお伺いできないかなと思うんですねけれども」)の発話後にも儀礼的な発話ではなく確実に目的達成に向けて話しを進めている(150「今度が19日にありますよね」)ことがわかる。

話し手の行為要求が受け手にそれほど心的負担を与えない場合の(1)と(2)のデータにおける構造的特徴は、話し手の直接的な情報提供とその後を追って行為要求が行われていることである。なお、言語形式的な特徴としては、「あの」の使用が挙げられる。それぞれのデータにおける性別・年齢別をみると、年齢はかなり差があるので年齢の問題ではないと考えられる。ただ、両方とも性別は女性であるため言語形式的な特徴として断言できる段階ではない。

ところが、話し手の行為要求が受け手に心的負担を与えてしまうデータ(3)においても「あの」は多用されているので、次のデータを見てみよう。

【Ⅱ】話し手の行為要求が受け手に心的負担を与えてしまう場合

(3) MがHにお金を返してもらうために電話をかける [KIM-5]

(M:話し手(20代・男性) H:受け手(20代・男性) 親しい友達)

8H 元気です。(いやいや。)
 10H やー、申し訳ない[笑い]遅くなってしまっ
 11M あ、なにが。
 12H あのー、あの、結局、休み取れなくて、銀行行ってないんです、まだ。
 13M ああ、お金のね!(はい。)
 15M そうそ、それでいま、電話してさ。(うん。)
 17M あの、この前、その通帳で確認したんだけど。(うん。)
 19M どこにも、H君の名前がないからさ。(うん。)
 21M うん、でー、ちょっとね、
 いまー、あのー、資金繰りが苦しくて / / ですね。(あーはあ。)
 23M あのー、できるだけ、その、早くー 入れていただきたいとー。
 24H わあっかりました。
 25M 考えているんですよ。
 こんなお願いは、なんか、ぶしつけで、 / / 申し訳ない。
 26H そんなことないす。
 27M うん、あのー(1.0)、

振込方は、振込方がわからないのかな、と思ってね。(うん。)
29M で、ちょっと、あの一、説明しようかと思ったんだけど。

データ(3)における構造的特徴として挙げられるのは、行為要求の導入部と行為要求後の情報提供に見られる「気配り表現」であろう。

行為要求の導入部においては、話し手の電話の意図を受け手が先に察して受け手による情報提供が行われるが(10H「申し訳ない、遅くなってしまっ
て」、12H「休み取れなくて、銀行行ってないんです」)、話し手は行為要求の内容を直接的に明らかにしない(11M「あ、なにが」、13M「ああ、お金のね」)。

また、行為要求を導入する前段階の情報提供においても間接的な表現を使用しており(19M「どこにも、H君の名前がないからさ」、21M「資金繰りが苦しくてですね」)、受け手に与える心的負担を充分考慮していることが分かる。

行為要求の発話後にも受け手への気配りが感じられる情報提供を行っている(27M「振り込み方がわからないのかな、と思ってね」、29M「ちょっと、説明しようかと思ったんだけど」)。

このような、話し手の行為要求が受け手に心的負担を与えてしまう場合の受け手考慮の戦略は、話し手の情報提供においても行為要求においても非常に間接的で、受け手の負担を配慮する「気配り表現」を使用していることが特徴として言えるだろう。

話し手の行為要求が受け手に負担を与えてしまう場合の例においては、話し手が目的を達成しようとする意識と受け手の心的負担を考慮しようとする意識の二つの要素が絡んでいるため、受け手との関係を破壊させない関係維持に中心を置いて会話を進めることになる。その結果、受け手との関係維持を優先する「気配り表現」が多く見られるようになるといえよう。

一方、言語形式的な特徴としては、データ(1)(2)で使用されていた「あの一」の多用と発話速度の遅さが挙げられるが、文字化における多数の長音記号の現れがその証拠であろう。「あの一」の多用については、話し手が男性であることでデータ(1)(2)(3)に限っては性別の問題はないと言えるだろう。

要求表現の言語形式的特徴として「あの一」が使用されるのは、行為要求による場の気まずさなどを和らげようとする意識が働いているのではないかと考えられる。

【Ⅲ】行為要求であることを受け手に明確にしない場合。

(4) 知り合いの迎えに行ってほしいと依頼をする内容 [NOI-5⁽⁸⁾]

(A: 話し手 (20代・男性) B: 受け手 (20代・男性) 親しい間柄)

5A あの一、今日、あの一、Mちゃんがね。(うん)

- 7A 帰ってくるんだけど。あのー、成田にね。(うん)
 9A 着くんだけど。(うん)
 11A えーと、なんか、昨日ね(うん)
 13A 10時からちょっと電話があって、
 本当は、T が迎えに行くんだって、らしいんだけど、
 なんか、(0.5) こっち、つくばにまだ来てないんだよ。(うん。)
 15A うん、で、昨日電話があって。(うん)
 17A あのー、今日、なんか、外語大のなんか仕事が入って。(うん)
 19A どうにもなんか、今日、遅くなんないと、来ないらしくて。(うん)
 21A でー、誰か、Mちゃん、迎えに行ってるって言う。【笑い】
 22B あ、本当。成田まで？
 23B え／／ー。
 24A らしいんだよ。【笑いながら】
 25A で、俺、今日仕事だから、
 26A えーと、誰かいないと思って、今、電話したんだけど。(ほんとう)

データ(4)は、話し手による行為要求が見当たらない例である。データ(1)(2)(3)においては、直接であれ、間接であれ話し手による行為要求が現れていたのに、データ(4)は話し手による行為要求が明確に現れていないのが特徴としていえるのである。ところが、データ(4)においては行為要求が違う形で現れているのである(26A「誰かいないと思って、今電話したんだけど」)。つまり、行為要求の発話であるはずのところが情報要求のようになっているのである。

しかし、データ(4)の話し手の電話の目的は、単に26Aの内容を話題として提供するためではないのである。「誰かいないと思って電話した」理由は、受け手がその誰かになってほしい話し手の希望が潜んでいるのである。それにもかかわらず、話し手は自分の行為要求を明確にしないまま話を延ばしている⁽⁹⁾。それだけでなく、行為要求を情報要求に仕立てるために話し手の情報提供においてもデータ(1)(2)(3)では見られなかった客観的な表現(13A, 24A「らしいんだよ」)が用いられているのである。

これは、話し手が行為要求そのものへの判断を受け手に任せることで、それほど強くない目的達成意欲より受け手との人間関係を保持しようとする意識がより強く働いているためといえるだろう。このようなことは、次の例からも見られる。

(5) フォーラムのハンドアウトを依頼する電話 [KIM-1]

(A: 話し手(20代・男性) H: 受け手(20代・女性) 親しくない間柄)

- 3H あのー、なんか、LFの／／あのー。
 4A はい、そうなんですよ。
 5H わたしーずっと出て、出たことないん／／ですよ、実は。
 6A あ、そうですか、(えー)
 8A あー。
 9H それで、明日も、あの、出る予定はなかったんですけど／／ー。
 10A あ、そうなんですか。
 11H えーもしなんか、ハンドアウトとかー／／ですか？
 12A いえいえ。

- 13A あのですね。(はい)
 15A あの一、十時からですよ。(あ、あした／／午前中ですね)
 17A ええ、ちょっと、午前中、アルバイトありまして。(えー)
 19A ぼく、出たかったんですけど、
 あの一、ただ、H先生がご発表になるということで。(えー)
 21A あの一、できれば、ハンドアウトをいた／／だきたいんですが。
 22H え、え、え、え。
 23A で、あの一、xx学の院生の方で、どなたかー／／出るんですか？
 24H へえ——と、と、どうでしょう。

データ(5)においては、話し手の行為要求を受け手の方が先に察しているが(11H「もしなんかハンドアウトとかですか」)、話し手はひとまずそれを否定している(12A「いえいえ」)。その後、話し手が否定していた行為要求を情報要求に変えて発話している(21A「できれば、ハンドアウトをいただきたいんですが」、23A「院生の方でどなたか出るんですか」)ことが分かる。

これは、受け手による情報提供が先に行われた(9H「明日も出る予定はなかったんですけど」)ことが起因しているとは思いますが、受け手による情報提供後もすぐに電話を切らないで話し手の情報を提供して(17A「午前中、アルバイトありまして」、19A「ぼく出たかったんですけど」)、先ほど話題になったことをもう一回情報要求の形で聞いているのである(21A「できれば、ハンドアウトをいただきたいんですが」)。これは、明らかに話し手が行為要求を情報要求に変えて受け手の心的負担を軽くしようと努めているところであろう。

このような、行為要求であることを明確にしない場合の構造的特徴は、話し手の行為要求のための情報提供が行為要求と直接つながらない話題提供に止まっていることである。いわゆる「話題提供型」のストラテジーを使用しているのである。

ここまで、日常会話における要求表現のストラテジーを三つに分けて考察してきたが、それぞれの特徴は次のようにまとめられる。

話し手による行為要求が受け手にそれほど負担を与えない場合は、「気配り表現」はあまり見られず、行為要求の導入部である情報提供が行為要求につながるように順序をふんで述べる傾向が見られた。

話し手による行為要求が受け手に負担を与えてしまう場合は、行為要求に入る前段階の情報提供において受け手の心的負担を考慮した「気配り表現」が多く見られたし、行為要求の発話後においても受け手との関係維持のための「気配り表現」を用いていることが分かった。

話し手が行為要求であることを受け手に明確にしない場合は、行為要求が情報要求とほとんど区別がつかず、「話題提供型」のストラテジーが用いられていた。

従来、要求表現は間接的で婉曲的なものが好まれると言われてきたが、一

概にそのようなことはいえないことが分かった。受け手に負担を与える場合は、従来言われてきた通り間接的で婉曲的なストラテジーを駆使しているが、行為要求であることを明確にしない「話題提供型」もあれば、「気配り表現」をそれほど使用しなくても済む場合もある。

これは、間接的で婉曲的な言語形式さえ取れば受け手とそれほどの摩擦もなく話し手の目的が達成できると考えられがちな日本語学習者にとっては非常に重要なポイントとなるだろう。

3. 日本語教科書の分析⁽¹⁰⁾

本稿で分析の対象にしている日本語教科書は、「コミュニケーション」を中心に行っている中・上級の教科書である。「構造文型」と「表現文型」を中心に行っている初・中級の教科書は今回の分析の対象からは除外する。

なお、話し手の行為要求が受け手にそれほど心的負担を与えない場合の例と行為要求であることを明確にしない例はほとんどなかったため、話しての行為要求が受け手に心的負担を与えてしまう場合のみを分析することにする。

【Ⅱ】話し手の行為要求が受け手に心的負担を与えてしまう場合

(6) 話し手のところに来てほしいとの内容

- 1A: 松田さん、ちょっとお願いがあるんですが。
2B: なんですか。
3A: ちょっと電話じゃ話しにくいことなんですよ。
4B: なんですか、電話じゃ話しにくい話って。
5A: 会った時に話しますよ。すみませんが、ここまで来てくれませんか。
6B: じゃ、家内がいま買い物に行っているの帰ってきてからいきますか。
7A: 何分ぐらいで来られますか。
8B: 三十分で行きますよ。
9A: すみませんが、お願いします。
10B: はい、わかりました。

データ(6)における会話の構成は、話し手による情報提供(1A「ちょっとお願いがあるんですが」、3A「ちょっと電話じゃ話しにくいことなんですよ」)、行為要求(5A「ここまで来てくれませんか」)、儀礼(9A「すみませんが、お願いします」)の順になっており、実際のデータ(3)における表面的な構造においてはそれほど違いはないように見える。

ところが、行為要求の前に受け手の事情をうかがうなどの「気配り」が見当たらない。また、受け手の状況説明(6B「家内がいま買い物に行っているの」)がなされた後でも関係づくりが行われていない。それどころか、逆に、受け手に心的負担をより一層与えてしまう情報要求を行っている(7A

「何分ぐらいで来られますか」)。このような構造は、実際のデータからはもちろん、日本語教科書の会話構造としても不適切な例といえよう。どのような親疎・上下関係を想定してみてもデータ(6)のような会話構造は受け手との人間関係を円満にできるものとは考えられない。さらに、言語形式的な側面においても実際のデータに多用されていた「あの」が取り入れられていない。

このようなことから、行為要求における言語形式(5A「すみませんが、ここまで来てくれませんか」)および関係づくりにおける言語形式(9A「すみませんが、お願いします」)をせっかく学習してもそれを有効なものとして生かすことが難しい。それは、次に挙げる例においても見られる。

(7) 手紙の日本語を直してもらいたいとの内容

- 3A: ああ、カーターさん。お待たせして、どうも。
4B: ううん、大したことないよ。
5A: 今日は、なんか特別な御用事でも。
6B: 特別というわけじゃないんだけど、
 明日か明後日、できたら僕の書いた手紙の日本語を直してもらえない？
7A: ええ、いいわよ。明日の歴史の授業の後は、どう。
8B: 時間が空いているから、ちょうどいいな。(じゃ、その時に)
10B: じゃ、よろしくね。(はい)

データ(7)はデータ(6)と同様、話し手の必要による電話だったにも関わらず、受け手への心的負担への配慮も関係づくりも見られない。

情報提供においては受け手に心的負担を与えまいとする配慮が見られるが(6B「特別というわけじゃないんだけど」)、話し手の事情を詳しく説明するなどの話し手の情報提供も足りない。なお、データ(6)と同様、受け手の事情などを聞く配慮が見られない。言語形式的側面においても行為要求の「できたら」を取り入れているだけで、関係づくりの表現も(感謝・謝罪の言葉)見当たらない。

データ(7)においても(6)と同様、言語形式の学習効果を充分生かせるストラテジーの学習を取り入れれば、上級の日本語学習者にとってはもっと有益なものとなるにちがいない。

(8) 翻訳を見てもらいたいと要求する内容

- 1A: 後藤さん、今いいですか。(はい。)
3A: あのう、個人的なことでちょっとお願いがあるんですけど。
4B: どんなことですか。
5A: 今、人に頼まれて翻訳をしているんですけど、
 ところどころ分らないところがあって。(そうですか。)
7A: すみませんが、暇なときにも見てくれませんか。(ええ、いいですよ。)
9A: そんなに時間はかからないと思いますので。
10B: じゃ、お昼でも食べながら相談するというのはどうですか。
11A: はい、お願いします。

(8)のデータは(6)と(7)に比べれば自然度の高いものである。その理由は、実際のデータに見られた構造と言語形式の特徴がよく現れているからである。まず、話し手の情報提供が丁寧に行われており(3A「あのう、個人的なこととでちょっとお願いがあるんですけど」、5A「人に頼まれて翻訳をしているんですけど、分からないところがあって」)、受け手の事情を聞く配慮が行われている(1A「今いいですか」)。また、受け手の心的負担度を考慮した行為要求の緩和(9A「そんなに時間はかからないと思いますので」)も見られる。

それに、言語形式的特徴として実際のデータで見られた「あのう」、「すみませんが」も用いられている。その使用に関してもデータの(6)(7)より自然であることが言える。しかしながら、行為要求後の関係づくり・儀礼においてはもう少し手を加えた方がいいように考えられる。

これまで、日本語教科書における要求表現の扱いと要求表現におけるストラテジーの表れ方を分析してきたが、言語形式に偏った(それも行為要求そのものへの)学習が中心をなしているため、十分な学習効果を期待できないものが多く見受けられた。上級レベルにおける場面設定においても上下・親疎関係に分けた設定はあるものの、ストラテジーの運用における細かな学習は充分行われていない。

また、実際のデータに見られた行為要求を明確にしない要求表現のストラテジーについてはほとんど言及されていないのが現状である。間接的で丁寧な言語形式だけを教えれば要求表現が使用できるのではない。上級の日本語学習者により自然で円満なコミュニケーションをはからせるためには、実際のデータに見られた「気配り型」、「話題提供型」のストラテジーを日本語教科書に取り入れるべきであろう。

4. おわりに

日本語教科書における要求表現のストラテジーは、中・上級レベルのコミュニケーション中心の教科書に取り入れられている。ところが、教科書に取り入れている要求表現のストラテジーは、単に話し手の情報提供、行為要求、儀礼という表面的な構造になっているものが多い。実際のデータで見られた受け手考慮の気配り表現が取り入れられている例はほんのわずかであった。そのため、せっかくの言語形式の学習が生きてこない会話文が多くなっている。それは、要求表現におけるストラテジーの基準要素である受け手考慮という要素を今まではあまり明確にしていなかったからであろう。

実際のデータの分析の結果によると、要求表現のストラテジーにおいては、受け手を考慮する「気配り型」のみならず、受け手に行為要求を明確にしな

い「話題提供型」のようなものも観察できたのである。

実際のデータに見られたそれぞれのストラテジーを教科書に取り入れるための方法であるが、まず、受け手考慮による「気配り型」のストラテジーについては、学習者によるストラテジー駆使のための教科書づくりを積極的に行うべきであると考え。一方、話し手の行為要求を明確にしない「話題提供型」のストラテジーにおいては、学習者のストラテジー運用よりは理解のための教科書づくりが必要と考える。つまり、「話題提供型」に関しては上級の日本語学習者が自分の要求表現のストラテジーとしてではなく、コミュニケーションにおける理解のための学習として取り入れてほしいのである。

今までの日本語教科書の構成においては、日本語学習者の習得が前提になっているところが多かったが、相手の発話を理解させるための学習も必要となってくるのではないだろうか。とりわけ、微妙な人間関係と深く関わっている要求表現においては、日本語学習者による円満な行為要求も大切であるが、相手の行為要求を把握できる能力も重要なポイントなると考えられる。

<注>

(1) Gumperz(1982)の用語の定義に従い、談話のやりとりの中で目的(goal)を達成するために話者が用いる手段を指すものと見なす。

(2) 要求する行為には指示・命令のようなものもあれば、依頼と許可を求めるようなものもある。たとえば、「～てください」という言語形式だけを見てもその意味はさまざまである。次の例を見よう。

1. この薬は必ず食後に飲んで下さい。
2. ボールペンを貸して下さい。

例文1の「飲んで下さい」と2の「貸して下さい」は、場面によっては指示にも命令の意味にもとれるものなので、その使い方に注意を払わなければならない。つまり、同一言語形式でもって果たせる機能は、コンテクストと状況によって違ってくる。それを列挙することは困難でもあるし、本稿のねらいでもないので、ここでは概念的定義を行うことにとどめる。

(3) この調査の経緯は、1994年度一年間、筑波大学大学院、堀口純子先生の日本語教授法研究(2)という授業の一環で行われたもので、ここに使われているデータも授業の参加者によって採集されてものである。従って、本稿で取り扱われているデータに関しては、その提供者の許可を得ているとともにそのデータの権限は提供者のものとする。

(4) 分析の結果における文字化と構造的考察においては、ザトラウスキー(1993)を主に参考としている。なお、各々のデータの被調査者(主に話し手)の心的判断に関する

部分はデータ収集後確認を取っている。

(5) [福田-4] は筑波大学大学院生の福田麻子のデータ4を示す。

(6) (48M) のような通し番号は引用資料の通し番号をそのまま使っている。以下の会話においても同様である。

(7) [KIM-8] は金河守のデータ5を示す。以下、KIM は金河守を指す。

(8) [NOI-5] は筑波大学大学院生のカクワシ・ラホフ・ラキットのデータ5を示す。

(9) 本文では会話文をすべて載せることができなかったが、話し手は受け手の様子をみながら何度も「だれかいらないかな」を繰り返して話を延ばしている。

(10) 本稿における教科書分析の目的は、各々の教科書の問題点を指摘するものではなく、あくまでも日本語教科書における要求表現を考察するためなので、引用している例の出典は控えることにする。

< 参考文献 >

- 岡野喜美子 (1991) 「許可を求める表現－タイムスケジュールをめぐる」 早稲田大学
日本語研究教育センター紀要3 .1991-3
Gumperz, John. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
ポリ・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの
考察－』 くろしお出版
森山卓郎 (1990) 「「断り」の方略－対人関係調整とコミュニケーション」
言語 Vol. 19. 8

< 参考資料 >

- 現代日本語コース中級 I (1989) (名古屋大学総合言語センター日本語科編)
日本語表現文型中級 I・II (1983) (筑波大学日本語教育研究会編)
Situational Functional Japanese vol. 1. 2. (1991) (筑波ランゲージグループ編)
現代日本語コース中級 I (1988) (名古屋大学総合言語センター日本語科編)
An Introduction to Advanced Spoken Japanese (1987) (アメリカ・カナダ大学連合 日本研究
センター, 創研社)
Communicating In Japanese (1992) (能登博義, 創拓社)